仲代達矢さん 84 歳

仲代達矢 84歳

演じる倒れるまで

新劇

なかだい・たつや　1933年、東京生まれ。52年、俳優座付属俳優養成所入所。舞台「リチャード三世」などで数々の賞を受賞。主な映画に「人間の條件」「切腹」「用心棒」「影武者」「乱」など。75年、妻で演出家の俳巳と俳優養成のための無名塾を創設。2015年、文化勲章受章。16年、米映画芸術科学アカデミー会員に選ばれた。

写真は日経新聞 1 月 7 日「文化」欄。リードから―仲代達矢、84 歳。現代演劇（新劇）の演技確立をライフワークとする役者は、新年から稽古に励む。倒れるまで演じたい―。あくなき挑戦心を語ってもらった。

最近、戦争をめぐる話題に以前と変わった風が吹いています。私は兵隊こそ行きませんでしたが、東京で空襲にさらされ、今日は生きられた、明日はどうかという日々を経験した。戦争だけはしてはならないという思いが強いんです。私が主演した映画「乱」は戦国時代を描いていますが、監督の黒澤明さんは撮影を終えて「これは反戦劇だからね」と言った。神の目線からの俯瞰図がとても多い映画でした。「愚かな人間どもよ」というわけです。

仲代達矢さん出演の映画をたくさん観てきた。印象に残る映画が多い。その仲代さんを、名古屋のあるホテルで偶然に見かけたことが。80 代というのに、背筋を伸ばして歩く姿勢と顔立ちに「オーラ」のようなものを感じた。記事を読み、フェイスブックで知った仲代さんの昨年 1 月 4 日「日刊スポーツ」のインタビュー記事を思い起こした。

戦争を知る、数少ない俳優の仲代達矢(83)。戦中はＢ29 の爆撃による空襲で逃げ回り、戦後は食べるものもない極貧生活も体験した。終戦を迎える 3 カ月前、当時 12 歳の少年には悪夢のような出来事にあった。「明治神宮の参道付近を、近所の小学生ぐらいの小さな女の子の手を引っ張って逃げていたら、急に手が軽くなった。彼女が焼夷弾を直接受けて、腕しか残っていなかった。数センチずれていたら、私に当っていたかもしれない。恐ろしくなって、腕を捨てて逃げてしまった。せめて、腕だけでもきちんと葬ってあげていたらという後悔が今でもあります」「戦争で一番被害を受けるのは大衆。絶対、戦争をしてはいけない」　戦後 71 年目の 16 年、仲代は強く訴える。

「今の政治家は戦争を知らない世代で、僕は戦争には行ってないけれど、戦争を知る最後の年代。戦争で一番被害を受けるのは庶民です。戦後 70 年は平和が続いたけれど、それは総理大臣が 2 年ぐらいで変わったのが良かった。これが強権の指導者がいて、今、『国を守る』とか『日本は世界平和のためにアピールしないといけない』と声高に言っている。僕も大衆の 1 人ですが、大衆は強い指導者に動いていきやすい。ちょっとやばいなという気がする。『国を守るためには』という言葉にアレルギーを感じるんです。そういうことを言い出したら、それはもう戦争なんですよ」

インタビューから 1 年あまり。仲代さんの言葉が、ますます現実味を帯びつつある。「強い指導者」の横暴を許してはならない。仲代さんの顔を思い出しながら考える。

(2017 年 1 月 14 日)